広島大学大学院教育学研究科 音楽文化教育学研究紀要 XXV　2013. 3. 22

都市の音楽芸能をフィールドワークする～台北音楽紀行

増　山　賢　治
（愛知県立芸術大学）

A Field Study on the Traditional Performing Arts in Taipei

Kenji MASUYAMA

はじめに

本稿は愛知県立芸術大学学長特別経費によって行った台北・香港音楽調査旅行（2013 年 1 月 4 日～ 1 月 20 日）のうち，前半の台北訪問（2013 年 1 月 4 日～ 11 日）で見聞した事象を音楽紀行としてまとめたものである。

今回の調査は「都市の音楽芸能をフィールドワークする」という主旨の下，台北には現在どのような音楽芸能の上演スポットがあり，何が提供されているかを幅広い音楽ジャンルに渡って観察し，漢民族の音楽文化が一都市にどのように展開され，開花しているか，そしてそれは大陸や香港とは如何なる共通点および相違点が見出されるか，それらの音楽文化の伝播と変容および相互作用，そしてぞれぞれの特徴を考える上での某かの端緒を見出そうとするものである。筆者は本調査以前に過去 3 回（1975 年，1984 年，1995 年）台北を訪れる機会があり，1975 年は京劇公演の鑑賞およびその文献・音源収集が中心で，他の 2 回は京劇を含めその他の伝統音楽についても随時，文献・音源の収集に務めたが，流行音楽や西洋のクラシック音楽にまで視野を広げることはせず，種々の音楽情報の収集に関しては滞在日数などの様々な要因により，幅広い実地体験，見聞をするための「町歩き」（筆者はこれを広義のフィールドワークととらえている）を十分に展開することができなかった。

そこで，今回の調査では筆者の前回の台北訪問（1995 年の 1 月 2 日～ 4 日）から 18 年という時の変化を体験するという意味合いも含めて，筆者のこれまでの台北訪問および様々な機会に収集した台湾漢民族の音楽に関する資料から得た知識と，それらを活用して執筆した数編の自著に反映されている台湾（台北）への認識との関連性を念頭に置きながら，台湾（台北）と大陸，香港および日本との相互関係も視野に入れて台北の音楽文化の現状を把握することを主目的とした。実際，今回の調査で最も印象的だったのは台北各地区を移動する際のアクセスが非常に便利になったこととインターネットの普及で，それらによって各種の情報収集の速度，効率が急速に高まったことを実感した。以上の状況を踏まえて，自らの中国音楽研究の最終段階へ進むために，今回得た諸情報（文献，視聴覚資料，街歩きなどで見聞して得た知識など）によって，いかなる研究の可能性，方向性が導き出されるかを示す試みとして本稿を位置付けたいと考える。

調査旅行の事前準備としては，台湾，香港に関する英文の旅行書（「LONELY PLANET」「TIME OUT」）や台湾の代表的な音楽芸能雑誌『表演芸術』などの文字資料を参考にしたほか，インターネットによる諸情報の検索も若干試みた。筆者が中国語入力によるインターネット検索能力をまだ身に着けていない関係で，同方面の十分な活用という訳には行かなかったが，それでも台北で滞在したホテルのロビーに顧客用として設置されているパソコンを使って，英語や日本語での入力ではあるが現地でネット検索を僅かながら利用できたことは有益であった。そうして選定した情報スポットへ実際に赴いてチラシや冊子を収集し，ポスターなどの広告掲示にも留意しつつ町歩きを実行して各種の音楽芸能公演を鑑賞し，そこで織り込みチラシなどまた新たな情報を得ていった。それでは，以下にその成果を，音楽上演情報収集のために訪れた台北の各エリアやスポット，実際に見聞した各種音楽芸能の公演，そして収集した音楽資料

の三点に分けて記していこう。

1　音楽芸能上演情報スポット見聞録

筆者は音楽芸能の上演情報の収集スポットと言えば，ホール・劇場・ライブハウス，書店，レコード店から繁華街，寺廟，テレビ，新聞などを常に念頭に置いて，都市の音楽文化を知るにはできる限り，広範囲に見て歩くことが必要だと考えている。今回の調査もそうした原則のもとに展開し，まず手始めに観光名所にもなっているほど人口に膾炙しているスポット，国家音楽庁と国家戯劇院に赴いた。この2つのホールは1987年に完成したものであるが，筆者ははじめて訪れた。蒋介石の銅像が置かれている中正記念堂に向かって左が国家音楽庁，右が国家戯劇院である（写真1）。国家音楽庁の外観のデザインは中国風だが，内部（後述の台湾交響楽団のコンサートを聴きに行った際に参観）は普通の西洋風の音楽ホールの作りになっていた（戯劇庁の内部には入る機会を逸した）。この2つは比較的新しいホールだが，このほか台北には新旧様々の上演スポットがある。新舞台は日本統治時代の1915年に基礎が築かれた歴史ある劇場（もちろん，現在はまったく新しい現代的な建築）で，筆者の台北滞在中に中国民謡のコンサート（1月9日）があったが，あらかじめ整理券を入手した人だけの限定入場だったので，鑑賞できなかったのは残念であった（写真2）。

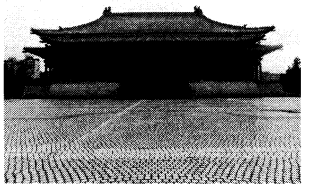
写真1

写真2

京劇をはじめ伝統音楽芸能の上演が多いのは中山堂である（写真3）。こちらも1936年に建設された「台北公会堂」がその源流といわれる由緒ある建物である。実質，京劇上演の専門劇場のように機能している台北戯棚（写真4）もその始まりは早く，1915年淡水戯館を台湾新舞台と改称，改築し，第2次世界大戦で一度消失したが，1989年に台湾財界の重鎮であった辜振甫が，著名な京劇俳優（立役）の李寶春を北京から招聘して台北新劇団を結成し，その専門上演劇場としてスタートさせたものである。一昔前まで京劇の専門劇場といえば，中華路にある国軍文芸活動中心であったが，今はその役目を終えている（写真5）。京劇俳優養成機関として長い歴史をもつ国立台湾戯曲学院（旧復興戯劇学校）はもう1つの重要な京劇上演場所として今も機能しているが，主に観光客相手の公演を行っているようである。筆者の台北滞在中に公演チケットが入手できず参観できなかったのは残念であるが，同校も今や京劇のみならず歌仔戯をはじめその他の地方劇の専攻科を増設していること自体，台湾の伝統音楽芸能の大きな変化を象徴している（写真6）。

写真3

写真4

写真5

ポピュラー音楽の大型ライブは台北アリーナで行われているようだが，ライブハウスの類では西門紅楼（108台北市万華区成都路10号）やLegacy（台北市八徳路一段一号，華山1914創意文化圏区，中五館）などがあり，ちょうど滞在期間中に催されていた西門紅楼の展示（同劇場の歴史を紹介するもの）がなかなか興味深かった。Legacyのライブイベントは見る機会を逃したが，そのチラシから1月26日20:00からSPECIAL OTHERSという日本のユニット（男性四人組）の初の台北公演告知が掲載されていることを発見した（写真7）。

写真6

新劇の上演スポットでは，牯嶺街小劇場は改装中だったが見学はできたので，そこに置かれているチラシを集めた（写真8）。その1つ，台北市立社会教育館『活動快訊』は城市舞台，大稲埕，親子，文山劇場といった各会場における音楽，舞踏，戯曲，親子，展覧の情報が詳しく掲載されており，社会の隅々

まで様々な音楽芸能の公演活動が行われている様子を垣間見ることができた。

書店は大型書店，古書店，音楽書店の三タイプを巡ることができた。何といっても大型書店の誠品書店の素晴らしさが第一に特筆されるべきである。一般向きの旅行ガイドブックでも紹介されているように新刊書を中心にCDやDVDソフトの品揃えも充実していて音楽芸能関係もかなり揃えることができる。カフェ，レストランなどの付帯設備（というより全体が総合施設）もさることながら書籍の分類が細やかで民俗学関係の書籍も一か所にまとめるなど，後日行った香港の書店が大ざっぱだったのに比べると格段に優れている。個人的には中国におけるキリスト布教に関する書籍も豊富であることも興味深かったが，何よりも大陸の研究者の図書が大量に出版されている（台湾版として繁体字で）のが目を引いた。一昔前なら大陸の書籍を手に入れるなら香港が一番便利だったが，今や状況は一変している。

台北にも古書街があり，店のほとんどが重慶南路一段の東側（すなわち台北駅に向かって右側）に位置している。古書街の歴史が簡単に紹介されているパンフレットには16店舗の位置を示した地図のほか「台湾両岸華文出版品および物流協会」の説明文も掲載されている。中国の音楽芸能に関わる書籍を購入したことのある者ならお馴染みの台湾商務印書館，世界書局，正中書局，鼎文書局など出版事業でも名の通った老舗が含まれていたので，ゆっくり一軒一軒回りたかったが時間の関係で果たせず，世界書局ほか数店舗に短時間の訪問となった。ただ，黎明書局は音楽芸能の録音資料を発行していたことを以前から把握していたので，同方面の資料を求めて他店より長時間立ち寄った（写真9）。このほか，地下鉄の地下街にも古書店が店を出しており，台湾京劇の黄金時代を収録したDVDを購入した（写真10）。

音楽専門書店は3軒訪れた。『大陸音楽辞典』の出版で知られる大陸書店は中国伝統音楽の書籍の品揃えは比較的少なく，西洋クラシックの楽譜が目立ったが，中国音楽書房，台北音楽家書房は流石に中国音楽に関する書籍も音源・映像も豊富であった（写真11，写真12）。

音源や映像は各種書店でかなり調達が可能であるため，レコード店巡りに時間がさけず，大衆唱片ほか数軒しか行けなかったのは残念であった。次回に期待したい（写真13）。中国楽器店については，日本で中国楽器の代表のように扱われている二胡などを中心とする新しい中国器楽の民楽（国楽という）に筆者はほとんど興味を失っている関係で，もはや関心外であったため，先進楽器の一軒に立ち寄っただけだった（写真14）。ただ，街歩きの途中，偶然見かけた楽器教室「楽功音楽楽器中心」（台北市衡陽路27号2F営業時間は午前10:00～午後9:00）のチラシ一枚は，今，台北でどんな中国楽器が教えられているかを知る上で参考になった。それによれば，中国楽器類と西洋音楽類と分けてあって，前者は次のような楽器が含まれている。竹笛，洞簫，葫蘆絲，二胡／京胡，古箏，古琴，琵琶／柳琴／中阮／三弦，揚琴。HPやブログもある。

宗教音楽のスポットである寺や廟は当然，その上演時期が特定されているので参観するためには予め調べておく必要があ

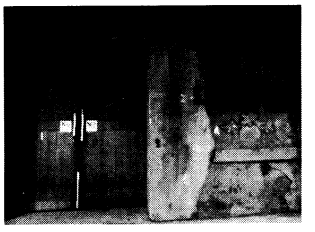
写真7

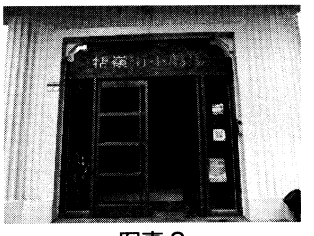
写真8

写真9

写真10

写真11

写真12

写真13

り，また寺院の関係者と事前コンタクトを取るのが前提であるため，今回は当初から対象外であった。しかしながら，近年，中国の宗教音楽には関心を持っているので，天后廟，行天宮にはじめて訪れる機会を得た意味は大きかったように思う。今回，孔子廟には行かなかったが，龍山寺を，はじめての台北訪問以来38年ぶりに訪問した。実際，台湾漢民族の音楽文化をより深く知るには，こうした宗教音楽に目を向けることが必須であり，そのことは後出の購入文献表中の台湾伝統音楽の概説書や同方面の映像資料を一瞥すると容易に理解されると思う。その他，西門エリアで遭遇した音（楽）風景，いわゆるストリートパフォーマーたち（盲人や若者のラップやダンス）の姿も忘れ難い（写真15，16）。

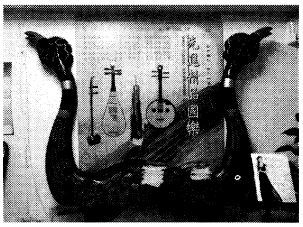
写真14

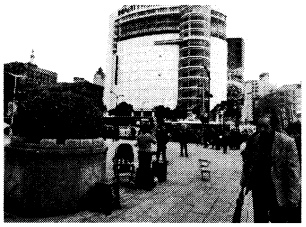
写真15

写真16

2　音楽芸能公演見聞録

今回の台北滞在中に出かけた音楽芸能公演は京劇2回とクラシック，ライブそれぞれ1回であったが，どれも様々な問題を想起させる興味深いものだった。まず，台北に到着したその晩の2013年1月5日19:30から中山堂で催された国光劇団による京劇公演は，昔なら考えられないような丑（道化役）が主役となる演目のみで構成され，しかも大陸から招いた崑曲の芸人や台湾の漫才のベテラン芸人が主演を務めていることも話題の1つだった。

伴奏楽団は舞台上の見える所に配置されている昔ながらの方式であるが，歌詞はもちろん，セリフもすべて字幕が映し出される。音楽的には京劇の歌唱の基本である皮黄腔ではなく，崑腔，吹腔などが中心となっており，横笛の主奏によるBGM曲「小開門」が聞かれたのも珍しいと感じられ，同劇団の主軸で名京劇女優の魏海敏に象徴される京劇と伝統と改革のバランス関係が上手く取られていた公演だった。チケットは600元（1元はおよそ2円から2.5円）。

写真17

もう1回の京劇鑑賞は1月9日の19:30から台泥大楼「士敏庁」で行われた台北新劇団の若手俳優たちによる（旧正月直前の）年末公演であった。上演の冒頭で団長の李寶春がステージ上で挨拶（劇団の紹介）をしたことは意外だったが，伴奏楽団はここでも伝統的に客席から見える所に位置しており，アクションが鑼鼓のリズムとタイミングが若干ずれてしまったり，俳優が小道具の武器を落とすなど失敗も数回あったが，京劇の政治性（外省人の権力を象徴する存在としての京劇）が希薄になったことを喜んでいるような雰囲気の中での熱演に，観客の拍手による反応や掛け声も全体に温かいものが感じられた。この劇団は通常，観光客向けの公演を多く行っているようだが，筆者が見た公演は現地の人々のための一般公演であった（写真17）。

次に個々の演目の感想を綴っておこう。老婆役（老旦）と道化役の2人のみで演じる「釣金亀」は老旦の喉はなかなか良く，冒頭の詩吟のような「引子」と呼ばれる部分からすでに喝采（「叫好」）が起こった。観客の平均年齢はやや高めだが，全体として老若男女各世代が集い，若い人（学生）も結構見かけた。道化役の男性はセリフ，演技ともまだ若い。老旦の聞かせどころの節（「二黄慢板」）では，歌の決め所も観客の歓声のタイミングもややはずれたという印象を持った。伴奏弦楽器の京胡は金属弦のような音色だが，聞かせ所の合いの手の部分（「花過門」）の演奏はまずまずであろうか。自由リズムの歌唱である「散板」の味わいはまだまだで，有名なアリアの「二黄原板」に至っては，独特のまくしたてるような老婆の口調が濃厚な「垛板」（シラビックな節）の箇所が残念ながら今一つだった。次の演目「別窯」では団長の李寶春（立ち役）が登場した。その登場の時に舞台裏で歌う「西皮倒板」からすでに拍手が巻き起こった。アクションは流石である。相手役の女形（女優）の喉は悪くない。高音も良く出ており，中音もよく瑞々

しい歌声で，立ち役との掛け合いも無難にこなしていたが，自由リズムの歌唱となると，やはり味わいが不足する。衣装の水袖（長い袖）のさばき方もまだまだで丸みや躍動感に欠ける。そして，全体に気になったのは2人の演技と歌の表現が写実的になっていることで，別れる時の顔の表情などまるで映画かテレビドラマのようで少々ヘキヘキした。セリフや語気も同様で，掛け合いに歌唱における女形の節（西皮原板）の終結部分ではテンポも装飾音も少々いじりすぎの感があった。それから，テンポ早い歌唱の「快板」の掛け合いでは最後の部分をハーモニーによる合唱で締めるというのは伝統的には全く考えられない措置で「奇妙」と言わざるを得ない。この演目後，15分の休憩があり，その時に筆者の前の席に居た中年男性二人が交わしていた京劇談義では，最近の良い役者（それも大陸の誰々とか）についてなどかなり熱心に展開されていた光景が面白かった。

最後は孫悟空が主役の演目だったが，実はこのようにサルが主役となる演目「猴子戯」がプログラムのトリになること伝統的にはあまりない。孫悟空役の役者に対する応援が熱く，棒術，ジャンプもなかなかで，まわりのサルたちの斉唱やアクションも悪くなかった。武戯（立ち回りの演目）にしては歌をかなり入れている方で，ダブル孫悟空（一方は偽物という設定）のアクションの息もよく合っていた。しかし，笙，笛，琵琶などを大幅に取り入れた形でのBGMを京劇で演奏し，しかも妖怪役の俳優たちによる奇妙なダンスが披露されたのはいただけない。ただし，アクションは良く，やはり若さがものを言っており，その型は中国武術そのものという印象を改めて受けた。武術アクションの醍醐味を味わうにはやはり鑼鼓の伴奏が良い。日本での京劇上演演目は相変わらず孫悟空中心だが，同じものでも日本で見るのとは大違いで，第一，観客の反応がツボを心得ている。観客に筆者以外，日本人はいないようだった。やはりそれに限る。10:10頃終演。

(2) 台湾交響楽団の演奏会

1月10日，19:30～国家音楽庁（台北市中山南路21-1号）。前半はモーツァルトの〈ドン・ジョヴァンニ〉序曲，続いてモーツァルトの〈ヴァイオリン協奏曲第5番KV.219〉で，後半はプロコフィエフの〈交響曲第5番変ロ長調，作品100〉だったが，体調の都合で前半で退席した。常任指揮者は日本人の梶間聡夫（かじまふさお），プログラムのプロフィールによれば，2010年8月から就任したとある。ソリストは神尾真由子で，2007年チャイコフスキーコンクール優勝者である。コンサートのタイトルは「愛と死の6，愛情の抉択 Love or Hell!」で，チケットの価格は1000元だった。プログラムに記載されていた国立台湾交響楽団のメンバー表には日本人の名は見当たらないが，台湾で活躍するあるいは台湾で愛されている日本人音楽家については日台関係を考える重要な1つのテーマになると思う。日台関係の歴史の中でとらえる今後の研究の展開が望まれる。

(3) ライブ

写真18

写真19

1月11日。「欧開的時光　O-Kai A Cappella 専輯首売演唱会（ファーストアルバム発売記念コンサート）」。西門紅楼の裏側に位置するライブハウス「河南留言」での男女アカペラグループ（漢民族と少数民族の混成メンバー）のライブである。確かに歌唱レベルは悪くないが日本でもこのレベルはいるし，率直に言ってゲストの2人（ベテランの男性歌手）の方が上だった。冒頭で披露されたお祈り風の楽曲を歌ったゲストのベテラン歌手，胡徳夫の歌声には涙が出た。思わず，ニュージーランドのマオリのロック音楽を連想したその素晴らしい歌声についての詳細は，後日改めて論じることとして，余談だが，このグループについては日本人による台湾音楽サイトでも紹介されていることを指摘しておく。しかし，筆者はそれを手放しで歓迎しているわけではなく，とにかく素人天国のネットの世界では深い文化的考察を求めるのは無意味だとしても，ただ情報を蓄積して流しているだけでマクロにもミクロにも考察できないものが横行することによって，マスコミはもちろん，民族音楽学の専門家たちもそういう情報を鵜呑みにしてしまう危険性が潜んでいる以上，その結果，「オタク」の天下が続くという事態だけは避けたいと考えている（写真18，19ラ

イブ会場入り口，開演前のステージ)。

3　収集資料ついて

最後にここでは，無料で入手したチラシおよび購入した文献，視聴覚資料についてまとめておく。

(1) 無料取得資料から得る上演情報

上記の資料，すなわち，各ホール，劇場，書店に置かれていたチラシや町で目にした広告・情報などから音楽芸能上演状況を知ることで，台湾の音楽文化の様相をより広範囲に見ることが可能となると考え，伝統音楽からポップス，クラシックに関するものまでできる限り収集した。一例を挙げると，台北市立国楽団のスケジュール冊子からは，同楽団の活動のみならず，大陸との交流を含めて台湾の国楽界の動向をかなり詳細に知ることができるので，それを読み解いて紹介する価値があると考える。しかし，そうした資料から得られる情報の意義に関する踏み込んだ分析は，今回は省略し，後日改めて報告したい。

(2) 購入資料

今回はジャンル的には台湾の音楽（主に伝統音楽）を概括的に扱ったものと京劇関係を中心に集めることを心掛けた。その他のものも若干集めたが，全体に過去の人物やジャンルで日本に縁の深かった人物（たとえば，作曲家の許常恵，音楽学者の呂炳川，古箏演奏家の梁在平ら）に関するものを優先し，尚且，筆者が所蔵している台湾の音楽に関する過去の収集資料との関連や対比が可能で，歴史的変遷を考察する上で有益だと思われるものを選定した。台湾音楽の概説書のうち，近年の台湾の民族音楽学界の動向を知ることにもつながることを考慮して，できる限り新しいものを入手したが，京劇関係はやはり台湾の京劇の基礎を築いた大陸出身の老芸人たち，すなわち，顧正秋，胡少安，章遏雲らを中心に，それらに加えて，目下，台湾京劇界を代表する女優，魏海敏の DVD 映像や今では完全に定着した感のある京劇における大陸台湾の交流の状況を扱った文献を入手できたのは有益だった。それらの内容の具体的な検討は今後の課題として，以下，購入した資料名をまとめて記す。

［文字資料］年代順，＊は香港で入手分
＊章遏雲著，沈葦窗編『章遏雲自伝』大地出版社，民国 74 年（1985 年）9 月
陳郁秀編『台湾音楽閲覧』玉山社出版事業股有限公司，1997 年 8 月（第 9 刷 2009 年 11 月）
鍾寶善『公営京劇団隊之回顧与展望』楽韻出版社，1999 年 6 月（再版 2010 年 7 月）
『両岸戯曲回顧与研討会論文集巻Ⅰ』国立伝統芸術中心籌備處，民国 89 年（2000 年）1 月
『両岸戯曲回顧与研討会論文集巻Ⅱ研討会紀実』国立伝統芸術中心籌備處，民国 89 年（2000 年）1 月
王安祈『金声玉振－胡少安京劇芸術』国立伝統芸術中心，中華民国 91 年（2002 年）
明立国『呂炳川　和絃外的独白』時報文化出版企業股份有限公司，2002 年 2 月 20 日
梁翠苹『許常恵音楽史料楽譜第二冊』国史舘，民国 91 年（2002 年）12 月 31 日
呂鈺秀『台湾音樂史』五南図書出版公司，2003 年 10 月（第 7 刷 2011 年 10 月）
陳郁秀『文化台湾　新世紀　新容顔』行政院文化建設委員会，2004 年 2 月 1 日
顔緑芬・徐玫『台湾的音樂』財団法人群策会李登輝学校，2006 年 1 月（第 3 刷 2010 年 10 月）
＊顔緑芬編『台湾当代作曲家』玉山社，2006 年 12 月
＊黄健庭『你聴，台東的聲音　台東音楽的手札記』台東県政府，財団法人台東県文化基金会，2010 年
『2012 台湾表演団体体名録 Taiwan Performing Arts In Focus』文化部，2012 年 9 月 28 日
［録音資料（CD)］
『箏　梁在平演奏』諦聴文化事業有限公司，1994 年
『梁訓益的平劇文場音楽（民族音楽系列専輯第 9 輯)』行政院文化建設委員会，民国 86 年（1997 年）8 月
『胡徳夫　忽忽』参拾七度製作有限公司，WFM05001，2005 年
［映像資料（DVD)］
『台湾海峡両岸戦事檔案』美安国際企業有限公司，HJ085，出版年代不明
『台湾崛起　戦後与二二八事件（1945-1949)』瑞訊文化事業有限公司，出版年代不明
『顧正秋劇芸精選 3　文姫帰漢』中華電視股份有限公司，出版年代不明

『顧正秋劇芸精選 4　王寶釧与薛平貴』中華電視股份有限公司，出版年代不明
『顧正秋劇芸精選 5　汾河灣』中華電視股份有限公司，出版年代不明
『顧正秋劇芸精選 7　珠痕記』中華電視股份有限公司，出版年代不明
『顧正秋劇芸精選 9　鎖麟囊』中華電視股份有限公司，出版年代不明
＊『伝統経典－美猴王』国立国光劇団，民国 91 年（2002 年）1 月（97 年 11 月三版）
『戯裡帝王家　秦香蓮』国立台湾伝統芸術総處籌處，民国 97 年（2008 年）10 月
『2011 年台湾伝統音楽年鑑』国立台湾伝統芸術総處籌處，出版年代不明
『魏海敏古典劇場－大師経典，極致綻放』財団法人公共文化事業基金会，2011 年 4 月
『迎神廟会』DVS-01，峻愷多媒体企業有限公司，2012 年 1 月 15 日
『北管音楽』DVS-02，峻愷多媒体企業有限公司，2012 年 1 月 15 日
・表記　繁体字，簡体字ともにできる限り日本漢字に置き換えた。

おわりに

総じていえば，1 週間ほどの短期間の滞在ながらできる限りのものを吸収できたと思う。1 月 12 日台北を後にして香港を訪れ，そして帰国後は自らが所蔵している中国音楽の膨大な資料（特に台湾の香港に関する）の有効性と価値について再検証する必要を感じている。滞在中最も印象的だったのは，台湾という社会がもはや二二八事件に対して自由に冷静に対処している成熟した社会となっていたことである。このことは筆者の過去の訪問時期には想像すらできないことだった。それから台湾と中国大陸や日本との関係を考える歴史的映像を集めた DVD ソフトが多く出ていたことも以前には考えられなかったことである。

音楽芸能の分野でも進行する海峡両岸交流のさまざまな成果（出版や公演など）に触れることができたことは，これまでの筆者の中国音楽の研究スタンスが間違っていなかったことを実感できたという点でも大変意義深いものだった。つまり，それぞれを切り離してどれかに集中しすぎ，あるいは視野から取りこぼす，むやみに礼讃し，甚だしきに至っては迎合するような無節提な研究姿勢，偏狭・偏向的な研究視野は中国大陸，香港，台湾のどれをも正しく理解することにはならないからである。演奏のみならず，研究，出版についても大陸との関係がますます緊密になっている台湾の状況をどう解釈するかという問題自体が非常に興味深いところであるが，今回の調査後の感想を率直に言えば，それは相互の交流であり同時にバトルでもあると考える。台湾は台湾色の強調（福建，客家など）と日本の活用（受容）を実に巧みに使い分けることで，大陸や香港に対抗していると思えるからである。

今回の調査で再確認したことだが，台北という都市には音楽ジャンルでも中国全土のものが多く集まっており（それは同市の各地区の通りの命名にも象徴されているように），その稠密性の様相が台北（福建，客家系中心）と香港（広東系中心）では異なっているが，ともに範囲の拡大傾向（以前は見られなかった河南省の豫劇や江蘇省の崑曲などの公演がかなり行われるようになったなど）が感じられる。

そうした事象を見ると，自国の音楽文化（人および物）への国家の対応の積極性が強く感じられ，出版分野においてもそれが地道に行われていることに驚嘆すると同時に，それに比して同方面に対する日本という国の冷淡さには絶望的な嘆息を禁じ得ない。そしてそれはさらに，台湾に対する日本（とりわけ政府）の冷淡さとも無関係ではないように思われる。台湾と日本との文化的交流関係はもっと積極的に論じられてしかるべきある。実際，クラシックやポップス（LUNASEA の台北公演および香港公演，その他インディーズ台湾公演の情報を目にしたなど）において日本人の音楽家が活躍している状況を日本のメディアはもっと報じるべきではないのか？（写真 20）

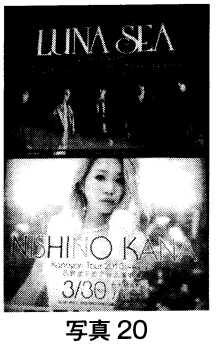

写真 20

そして，台湾と日本の過去の関係についてももう一度とらえ直すことにより，台湾に対して日本が貢献できること，あるいはすべき役割は何であるか考えることが急務であると感じた。いわゆるオタクと称される人々のように，ただ中国，香港，台湾の何かを愛好するがゆえにそれぞれに迎合するか，逆にもしくは反発，排撃するかでは何の意味もない。こうした不正常な状況は，結果として中国，台湾，香港の旅行ガイドブックである『地球の歩き方』における文化に関する低レベルの記事

や『ニューグローブ音楽大事典』の「香港」のような明らかな誤情報を多く含む出版物を生み出しているのである。

今回の調査を通して，京劇音楽の研究に関わる一人である筆者にとって，台湾の音楽ジャンルの中で最も関心を抱いたのはやはり京劇であったが，あのように素晴らしい台湾の京劇の伝統をほぼ無視し続けている日本の閉鎖的状況を今こそ打破すべきであることを再確認した次第である。

上記に述べたとおり，チラシと町歩きなど主としてアナログ的手法で収集した情報に依拠して書かれた本稿は，近年の優秀な若手中国音楽研究者や民族音楽学や中国学の泰斗からすれば，取るに足らない雑文であろうが，こうした基本的なはずの事柄さえ，爾来蔑ろにしてきたことを思えば，一定の意義を有するものと考える。確かに現地に行かないと分からないことは当然ある。ネット検索のみでは不十分であることはいうまでもない。が，それと同時に長期間現地を訪れずとも，情報収集と解析能力の点で専門家として水準を維持する姿勢を貫くことができれば，必ずしも本質を外した理解に陥ることはないという思いに至った。要は事象に対する洞察力，観察力，感度の高さ，読みの深さなどが専門性の深さにつながるものなのであろう。現地に居住しているからといって音楽文化の専門家でもない者が，何ら視点の設定もなく然り顔で書き，語る行為がネット上に横行，しかもそれをマスコミが出版物にするという悪しき状況から，ますます鮮明に見えてきたのは，日本における中国音楽受容の歪曲性，中国音楽の報道および研究の狭小性，偏向性，大陸，香港，台湾などをトータル見ることができず，時空ともに局部的認識から抜け出せずに袋小路に陥っている日本の姿である。

本稿では日本ではこれまでほとんど無知か無視，偏狭的姿勢の状態にあった香港，台湾の音楽文化についての認識上の欠陥，すなわち，大陸，台湾と香港の文化交流の展開によって急激に変化している各地の音楽文化の状況に照準を合わせられない無知・無関心のままの日本は，大陸，香港はおろか，挙句の果てには台湾からも遺棄されてしまう可能性が筆者には見えてきてしまうのである。今回の台北滞在では広島大学大学院教育学研究科で博士号を取得した曹念慈小姐と再会した際に数々の貴重な情報を提供していただいた。ここに感謝の意を表したい。